武蔵野幕屋 日曜聖書講筵

エレミヤの召命
――エレミヤ記１章１～10節――

１９７４年１月13日
小池辰雄

エレミヤ書全52章　「ヤーヴェーの矢」　ヨシヤ王の宗教改革　カルケミシの大会戦　万国の預言者　畏るるなかれ　「共に」と「中に」　人格と霊格　平伏しぶっつぶれ　中共人　霊と言

【エレミヤ１】

1こはベニヤミンの地アナトテの祭司の一人なるヒルキヤの子エレミヤの言なり 2アモンの子ユダの王ヨシヤの時すなわちその治世の十三年にエホバの言エレミヤに臨めり 3その言またヨシヤの子ユダの王エホヤキムの時にものぞみて ヨシヤの子ユダの王ゼデキヤの十一年のおわり即ちその年の五月エルサレムの民の移されたる時までにいたれり 4エホバの言我にのぞみて云う 5われ汝を腹につくらざりし先に汝をしり 汝が胎をいでざりし先に汝を聖め 汝をたてて万国の預言者となせりと 6我こたえけるは 噫主エホバよ 視よわれは幼少により語ることを知らず 7エホバわれにいいたまいけるは 汝われは幼少という勿れ すべて我汝を遣すところにゆき 我汝に命ずるすべてのことを語るべし 8なんじ彼等の面を畏るる勿れ 蓋われ汝と偕にありて汝をすくうべければなりと エホバいいたまえり 9エホバ遂にその手をのべて我口につけエホバ我にいいたまいけるは 視よわれ我言を汝の口にいれたり 10みよ我今日汝を万民のうえと万国のうえにたて 汝をして或は抜き 或は毀ち 或は滅ぼし 或は覆し 或は建て 或は植えしめん

●エレミヤ書全52章

今日から旧約聖書預言書の、大預言者イザヤの次に出てくるエレミヤです。エレミヤ書は全52章だったかな。１年は52週間で、１章ずつやっても１年かかる。ところが、52週は集会は夏の休みもありまして、出来ませんが。１年以上になるかも知れませんが、とにかく、１年かかってエレミヤと歩きたいと思うわけです。

私の藤井先生もエレミヤは非常に好きな人物で、「エレミヤとダンテ」という先生の随筆みたいなものもありますが、非常に人間的に慕われている。内村先生も非常に患難なときにエレミヤ記を愛読されたようです。内村先生の英語の聖書のエレミヤの所を、私はチラッ

と拝見したことがある。いろいろ書き入れがあった。柏木のクリスマスに私は飛び入りで行ったことがある。その時の印象が今でも残っていますけれども。

〔註：「小池辰雄日記」の１９２４年12月28日（日）にそのクリスマスの印象が記されてある〕

無教会は使徒というよりも、この預言者――内村先生も預言者的なひとでしたから――預言者に対してはある親しみを感じていた。特に藤井先生は預言者が非常に好きでしたね。１９２７年の秋は、「預言者の秋」として私は覚えている。非常に何ともいえない秋でした。そんなほのかな思い出があります。

〔註：「小池辰雄日記」の１９２７年12月19日（月）に、「今朝の一首、明星をのぞみて、弦月もかかっていた。『曙の星を望みて言い難き祈りききたる預言者の秋』。それを以て、本当にこの秋の「折にふれて」の終りとしたい。それは本当に与えられたのだ、かくうたえと。そして、この「秋の巻」を閉じよ！と。アーメン。」とある〕

今の私にとっても、不思議なことにこの預言者エレミヤというものが非常に私の歴史的な意味において身近に感ぜられるので、今年から預言者エレミヤに入るということを――だいぶ前からそんな気持はしていたんですけれども――それがある必然性を持っているということをいよいよ感ずるわけです。まぁそんなことであります。

今日は１章の１節から10節まで、「エレミヤの召命」と題して学びたいと思います。概説的なことは始めにあまり言わない方がいいと思って、いきなり本文に入ります。

●「ヤーヴェーの矢」

1 こはベニヤミンの地アナトテの祭司の一人なるヒルキヤの子エレミヤの言（ことば）なり

「祭司」は複数です。「ベニヤミンの地アナトテ」というのは、エルサレムの北々東の６キロ余りあるような所です。死海の北のはてのずっと西にあたります。そのアナトテのすぐそばにギデアがある。エレミヤはヒルキヤという祭司の子であるので、預言者といいましても、家柄からいうと祭司です。しかし、エレミヤはおよそ祭司的なものとは性格的にちがうようです。「エレミヤ書」は「エレミヤフー」あるいは「エレミヤー」という、「ヤーヴェーが射る」「ヤーヴェーが矢を射る」という意味です。だから、名詞的にいうと「ヤーヴェーの矢」「神さまの矢」になったという面白い名前です。

背景的には、ユダの王ヒゼキヤ、それからその次がマナセ、アモン、ヨシヤ、エホアハズ、エホヤキム、エホヤキン、ゼデキヤと続く。マナセというのは紀元前697年から641年。そのマナセの晩年に彼は生まれたので、大体650年前後、即ち紀元前７世紀のまんなかにエレミヤは生まれた。日本でいうと、神武天皇の出現前後というようなところ。マナセは55、56年在位していたなかなか永い王様です。大変なもんだ。ヒゼキヤという王様は敬虔なひとだった。マナセはあまりよくない。けしからん。これは偶像崇拝の方だ。エルサレムの

神殿に偶像を入れたり、いつわりの預言者を入れて、真の預言者を迫害したような王様で、こういう王様ですから、神さまの怒りがくるわけです。

アモンというのは在位がたった2年位しかいない。非常に短い。アモンの子ヨシヤは――大体、ユダの王様は世襲ですから。イスラエルの方はそうではなかった――ヨシヤは８歳の時に即位したわけで、これが紀元前639年から608年。このヨシヤというのはちょっと大事な王様です。このヨシヤ王の頃は、アッシリヤが勿論勢力を持っていたけれども、スクテヤという蛮族が北の方からやってきて、アッシリヤみたいな強いのをなおやっつけるようなもの凄い剽悍な種族があった。スクテヤでもってアッシリヤは少し調子がわるくなった。アッシリヤの王様にアッシュルバニパルというのがいますが、これがスクテヤにやられて、アッシリヤは俄然その衰運をたどるわけです。

そうすると一方、アッシリヤの南の方のバビロニヤ――カルデヤといってもいいですが――このカルデヤ王国、ナボポラッサルという、これがカルデヤ王国を建てました。このナボポラッサルがカルデヤを建てた頃がエレミヤがちょうど召命を受けたような時にあたる。だから、エレミヤは相手がこのバビロニヤになるわけです。エレミヤが召命を受けたのは紀元前626年、ヨシヤ王の時代です。

「召命」「ベルーフ」（職業）というのは神さまから呼ばれること。「天職」のことをベルーフという。だから、職業は本当は天職なんだ。召命です。そういう状況下に彼はあった。スクテヤがやってきて、アッシリヤがやっつけられて亡びて、バビロニヤが建った。片一方にはエジプトがいる。そういった大国の動きの中にエレミヤは召命を受けた。

●ヨシヤ王の宗教改革

ところが、紀元前621年、これは忘れることのできない年号です。何が起きたかというと、神殿の中から「申命記」が発見された。エレミヤが召命を受けて間もない頃です。申命記が偶然なことで神殿の中から発見されて、こういう律法があったかというわけで、ヨシヤ王はこの申命記に従って宗教改革をやるわけです。ヨシヤ王の宗教改革というのはそのことなんです。何をやったかというと、今までの特にマナセなんていう前の王が入れた偶像をすっかり破壊してしまって、ヤーヴェーの礼拝をエルサレム中心にしたわけです。エルサレム神殿を唯一の神殿として全国民が――何もメッカにお辞儀するようなわけでもないでしょうけれども――エルサレムの神殿を中心とした信仰でいけということです。即ち唯一神をはっきり形態の上でも象徴的に表してきた。だから、非常に宗教的な統一は一応できたわけです。形の上で統一ができたということは、また形式的になるひとつの前提がそこに潜在するようなことにもなってしまったわけです。キリストは即ち、

「神さまはゲリジムでもなければエルサレムでもない。どこでも拝せるんだ」

と言われた。その「どこでも拝せる」ということは、方々に神殿を建てろという意味では

ない。そこでもキリストの宗教改革は徹底的なものです。まぁ内村先生の「無教会」というのはその精神から来ているわけです。

もう少し状勢をいいますと、カルデヤとメデヤの連合軍がアッシリヤをやっつけた。それが徹底的にやっつけられる。例のヨナ書に出てくるニネベを攻略したのが紀元前612年。612年にアッシリヤのニネベが陥落。そうこうしていると今度は、エジプトの王様のパロ・ネコがまた、アッシリヤが衰退したのでのし上がってきて、ユダに攻めかかってきた。そして、ヨシヤはエジプトと戦いたくはなかったけれども、仕方がない。自ら出掛けて行って、ネコとメギドの戦いにおいて破れた。これが紀元前608年。これはユダにとっては致命的な戦いで、それからユダの国はグッと急角度で衰退していく。名君ヨシヤが仆れたものですから。その次のエホアハズは紀元前607年に即位しましたが、これは三日天下みたいに、たった三ヶ月でエジプトのネコにまたやっつけられて、縛られて連れて行かれてしまう。そこでネコが今度は傀儡王をたてたわけです。それがエホアハズの異母兄にあたるところのエホヤキムという。これはエジプトのネコによって立てられた。そういったいろいろな波瀾があるわけです。そのあとずっとエレミヤが預言者として立っていく、ユダの滅亡に至るまで。悲劇的な預言者です。

そこで、宗教改革はされたけれども、神殿中心の宗教で形式に堕したから、エレミヤは、

「神殿、神殿、神殿と言うな」

という言葉がある。

「大事なことは本当の実存だ」

という意味です。だから、もう非常に不義不信、偽善、貪欲、社会的ないろいろな乱れで、預言者エレミヤはそれらを神の言葉によって言わざるをえない。これがエレミヤ記の一番大事な内容になってくるわけです。

●カルケミシの大会戦

エジプトのネコが更に北上してシリヤの方へ行くわけです。そうすると今度は、エジプトがのさばってきたというので、カルデヤがやって来た。カルデヤ軍（バビロニヤ軍）とエジプト軍の大衝突。これがカルケミシの大会戦という。奉天の大会戦みたいにね、関ヶ原みたいに。それでカルデヤが勝った。エジプトが負けた。これが紀元前605年。もうそれでネコは退いた。そこで東方世界の覇者はカルデヤとなった。カルデヤといってもバビロンといってもいいですよ。

エレミヤの弟子にバルクというのがいまして、それに自分の預言を巻物に記させた。エホヤキム――これは擁立された王様で、なっちょらんですから――エホヤキムにその巻物を読ませたところが、王様はその内容を怒ってしまって、その巻物を火にくべて焼いてしまった。それは紀元前604年のことです。仕方がないから、エレミヤはもう一遍これを書いた。

その時には更に上からの示しがあったので、前に焼かれたものよりか内容的に多いだろうといわれている。それを書いたのがエレミヤ記の主要な部分をなしている。そういうわけの由来のものです。

ナボポラサルの後に、有名なバビロンの王様ネブカデネザルがやって来て、エルサレムにまた迫ってきたわけです。そうこうしているうちに、エホヤキムは死にまして、その子のエホヤキン、これもやはり三日天下で三ヶ月。ということは、バビロニヤにやっつけられて、バビロニヤに捕囚される。囚われの身となる。紀元前597年。そして、エホヤキムの弟であるところのゼデキヤというのを立たせた。これが紀元前596年から586年。586年に南の王国ユダが亡びるわけです。まぁ随分残酷なことがあったね。殺されたり、目玉をくりぬかれたり、砂漠の民というのはなかなか凄いから。

そういうような国際状勢の中でエレミヤは立って、そしてユダの滅びのときに国と共に彼もまたとうとうエジプトに行って、あそこでもってエレミヤは忌憚なく言うものだから、迫害されて死んだらしい。最後ははっきりしないけれども。

2アモンの子ユダの王ヨシヤの時すなわちその治(よ)世の十三年にエホバの言エレミヤに臨めり

そこから預言が始まる。ここらの年号はしっかり覚えておいてください。なかなか旧約聖書は詳しく書いてあるね、場所とか年号とかを。

3その言またヨシヤの子ユダの王エホヤキム（紀元前608～597）の時にものぞみてヨシヤの子ユダの王ゼデキヤ（紀元前597～586）の十一年のおわり即ちその年の五月エルサレムの民の〔バビロニヤに〕移されたる時までにいたれり

本当に国の滅亡にまで至るところのものがこの預言である。626年から586年まで、40年間の預言だよ。大変なものだな。エレミヤが召命を受けたのが626年で、彼が生まれたのが650年位だから、23、24歳で、20歳を少し超えたころ。ちょうど今の「ヨルダン」の連中だ。どうだね、ひとつ立てるかな？　だから、しっかり読んでくださいよ。

〔註：当時、武蔵野集会では青年男子組を「ヨルダン会」、壮年男子組を「ガリラヤ会」と呼んでいた。〕

4エホバの言我にのぞみて云う 5われ汝を腹につくらざりし先に汝をしり

「お母さんのお腹にまだ出来ないうちにお前を知り」というんだから、大変なことだな。

汝が胎(たい)をいでざりし先に汝を聖(きよ)め 汝をたてて万国の預言者となせりと

もう完全に予定説だよな、これは。カルビンもここらのエレミヤのこういうのを見て、「これはもう予定だ」と思ってしまったんだな。しかし、

「もう予定がなければ、どうにもならない」

と思うことはない。「フォールゼーウング」（Vorsehung）というドイツ語は面白いね、「あらかじめ見る」「先見する」という。これは「摂理」という言葉です。もう「先見された存在」

「フォールゲゼーネスザイン」（Vorgesehnes-Sein）というわけだ。

「腹につくらざりし先に知るというのは一体あるか」

ということになってしまうね、科学的にいうと。非存在を知るということだから。霊的存在の――何というかね、ニーチェの「永劫回帰」ではないけれども――グルグルと、まぁ仏教の「生まれ変わり」というのもありますが。とにかく、本当の存在のそのものからということですから、

「そういった存在が出る前から、自分の存在そのものが予定されていた」

ということになるわけだな。存在そのものが神さまから予定されている。知られていた。

●万国の預言者

パウロがガラテヤ書の１章15節で、

「15**されど母の胎を出でしより我を選び別ち、その恩恵をもて召し給える者**16**御子を我が内に顕して其の福音を異邦人に宣伝えしむるを可しとし給える時、われ直ちに血肉と謀らず**」（ガラテヤ１・15～16）

と。ダマスコ途上の啓示のことを言うわけだ。

「1**人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ**」（ガラテヤ１・１）

と書いてある。とにかく、このパウロは

「母の胎を出でしより我を選び別ち」

と、生まれてから選びわかたれた。預言者エレミヤは、生まれぬ先に立てられた。

「闇の夜に啼かぬ烏の声聞けば生まれぬ前の父をしぞ慕う」

という。白隠の歌だよな。「闇の夜に啼かぬ烏」というんだから、真っ暗のところで啼かない烏の声を聞けば、生まれぬ前の父が恋しくなる。そういう消息ですよね。

だから、「知る」というのは、本当に存在を神さまが霊的人格的に知りたもう。霊的人格的というのは、これも離すことができないです、この信仰の世界では。いいですか。単に霊的でも単に人格的でもない。

「霊的人格」

ということ。「父よ」という神。そして、

「神は霊なり」

という、あのキリストのヨハネ伝４章は大事な言葉です。即ち、

「父神・霊神」

という。父なる神、霊なる神。人間の存在も、この「ガイスト」とそれから「ヘルツ」、霊と心。パウロが、

「霊で祈れ、心で祈れ」

と言っているでしょ。霊で祈る方は異言や何かになる方だ。心で祈るのは普通の言葉で。

「万国の預言者とした」

というんですから、全くこのただ中に置かれた。そういう声を聞いてしまった。断定しているんですからね。

6**我こたえけるは 噫(ああ)主エホバよ**

「噫」という、「アハー」という感嘆句がちゃんとヘブライ語でも出ているよ。

「アハー　アドナーイ（噫(ああ)わが主よ）**、ヤーヴェー　ヒンネー**（ヤーヴェーよ見よ）」

という。

とにかく、この「アー」という発音は万国に共通なんだね。だから、「ア」の字は真理の――「阿吽(あうん)の呼吸」というね――「オー」というよりか、「アー」の方が明るい。もっと全身的な響きです。「アイウエオ」というけれども、「イー」というのは良くないんだ。これはちょっとサタンめいている。「イーだ」なんて言うからね、小さい子が。自然にそういうのが出てくる。ゲーテの「エルルケーニッヒ」（Erlkönig、魔王）という詩があるが、あそこで魔王が子供に呼びかけるときに、「イー」の字がたくさん出てくる。さすがにゲーテはそういった真理がよく分かっているね。読んでいると、薄気味悪くなる。「ウー」は少しとぼけたような、「エー」なんていうのは少しふざけたようなもの。まぁ「ア」と「オ」が始めで終わりだよなやっぱり。アルファにしてオメガという。「アイウエオ」もやっぱりアルファにしてオメガです。「イー」に誘われてはいかんよ。どうも私はそういう調子だもんだから、

「小池先生はユーモラスにものを言う」

なんて言われる。

●畏るるなかれ

6**我こたえけるは 噫(ああ)主エホバよ**

「アハー　アドナイ　ヤーヴェー　ヒンネー」

という。

視よわれは幼少(おさなき)により語ることを知らず

「そんなことをおっしゃるけれども、私はまだ二十歳前後で、何を言っていいかわかりませんよ」

と。「知らず」というのは、「語れない」という、ほとんど「能わず」の意味です。語るすべを知らずということで、「知る」という言葉が使ってあるわけではない。

「自分は語れません。語る能力はありません。困りますよ」

と。神さまの方では、

「知らないからいいんだ。知ってたら困るよ」

と逆にくるわけです。

7 **エホバわれにいいたまいけるは 汝われは幼少(おさなし)という勿(なか)れ すべて我(わが)汝を遣(つかわ)すところにゆき 我(わが)汝に命ずるすべてのことを語るべし**

これは非常に大事なことです。

「我は汝を遣すところのもの、汝は遣わされたるもの」

であり、汝を遣わす。即ち、キリストがやはり「父に遣わされたるもの」です。

「**我(わが)汝を遣(つかわ)すところにゆき 我(わが)汝に命ずるすべてのことを語るべし**」

「選択は要らん。遣わす所へ行け。言ったことはみんな語れ」

と。即ち、手足の行動と口の語りは、

「行言全部これは私の言いなりだぞ、私の力で動いて行け」

と。こういうことです。だから、なまじっか知っていたらダメだ、知らないのがいいと。これはもうキリストの角度で、無者の角度です。無言無行です。

「お前は無言無行だから、私によって行をせよ、私によって言をせよ」

ということだよな。そうすると、

「出来るでしょうか？」

なんて言うことはない。

「出来ないから、させてやるぞ」

という。だから、畳みかけて、

8 **なんじ彼等の面を畏(おそ)るる勿れ**

それは周囲はみんな強国で、「万国の預言者」だからね、ユダばっかりではないんだ。

「畏るるなかれ」

と、これははっきりと神さまに本当に密着してなかったら恐くなるからね、

「彼等の面を畏るるなかれ」

と。何か言う時によく聖書では、この「畏るるなかれ」が出てくる。

「畏れなき世界に入れてやるぞ」

ということです、「畏るるなかれ」というのは。自分で頑張ったってダメだ、やせ我慢したってダメだ。

「畏れなき世界に入れてやるから、畏れはなくなるぞ」

というわけだ。これは御霊の世界は全くこれです。

蓋(そは)われ汝と偕(とも)にありて汝をすくうべければなり

これはまた大事なことです。なぜ恐れることがなくなるかというと、

「私がお前と一緒にあって、お前を救うんだから、恐れることはないんだぞ」

ということになるんです、今度は逆に。うしろの方が重いわけです。

「お前と一緒にあってお前を救う」

と。「一緒にいる」ということは「救う」という、力を与えること。ただ一緒にいるのでは

ない。神さまが一緒にいるということは、救いつつ一緒にある。

とエホバいいたまえり

もう神さまから直接にこういう力強い言葉がきたら、俄然これでもって動き出す。自分の信仰で「こうだろう」なんてやっているのではないんだから。そんな「だろう」なんていう世界ではないんだ。

詩篇はこっちから祈っている言葉でしょ。預言書というのは、上からきている言葉を伝えているんですから、預言書の方がもっと福音的に本願的なんです。詩篇は悲願的です。詩篇の或るもの足りなさというものは――詩篇の中に勿論神さまの言葉が出てくるよ、そういうところはいいけれども――こちら側の祈りだけになったらば、祈りが本当に祈りであるためにはやはり本願を受けとらなければ祈りになりませんけれども。しかし、預言者の方は上から来ているからね。

●「共に」と「中に」

そこで、「共に」ということを少し調べようと思う。これはヨシュア記の所に非常にはっきり出ている。ヨシュア記の第1章、モーセがヨシュアにバトンタッチするところです。

「1エホバの僕モーセの死にし後

モーセはエホバの僕だよ。ヤーヴェーの僕なんだ、モーセは。

エホバ、モーセの従者ヌンの子ヨシュアに語りて言いたまわく 2わが僕モーセは已に死ねり 然ば汝いま此すべての民とともに起ちて このヨルダンを済り我がイスラエルの子孫に与うる地にゆけ 3凡そ汝らが足の蹠にて踏む所は我これを 盡く汝らに与う 我が前にモーセに語りし如し 4汝らの疆界は荒野および此レバノンより大河ユフラテ河に至りて ヘテ人の全地を包ね 日の没る方の大海に及ぶべし 5汝が生きながらうる日の間 なんじに当る事を得る人なかるべし 我モーセと偕に在りしごとく汝と偕にあらん 我なんじを離れず汝を棄てじ 6心を強くしかつ勇め 汝はこの民をして我が之に与うることをその先祖等に誓いたりし地を獲しむべき者なり 7惟心を強くし勇み励んで 我僕モーセが汝に命ぜし律法をことごとく守りて行え 之を離れて右にも左にも曲るなかれ 然ば汝いずくに往きても利を得べし」（ヨシュア1・1～7）

勝つぞという。それから、著しいところがある。士師記の6章12節、あのギデオンのところ。

「12エホバの使之に現れて 剛勇丈夫よエホバ汝とともに在す といいたれば 13ギデオン之にいいけるは ああ吾が主よエホバ我らと偕にいまさば などてこれらのことわれらの上に及びたるや われらの先祖がエホバは我らをエジプトより上らしめたまいしにあらずやといいて 我らに告げたりしその 諸の不思議なる行為は何処にあるや 今はエホバわれらを棄て ミデアン人の手に付した

まえり 14**エホバ之を顧みていいたまいけるは 汝此汝の力をもて行き ミデアン人の手よりイスラエルを拯いいだすべし 我汝を遣すにあらずや** 15**ギデオン之にいいけるは ああ主よ我何をもてかイスラエルを拯うべき 視よわが家はマナセのうちの最も弱きもの 我はまた父の家の最も卑賤きものなり** 16**エホバ之にいいたまいけるは 我かならず汝とともに在ん 汝は一人を撃つがごとくにミデアン人を撃つことを得ん」（士師記６・12～16）**

相手が何人いようが、一人のように簡単にやっつけるぞ、私がお前と一緒にいるぞと。昔はエホバは戦の神さまとして強かったようなわけです。

それから、出エジプト記に大事なのがあった。出エジプト記3章のモーセのところ。

「イスラエルの民を救え」

と言ったところが、

「とても私は出来ません」

と答えたら、神さまが、

「12**神いいたまいけるは 我かならず汝とともにあるべし 是はわが汝をつかわせる証拠なり 汝民をエジプトより導きいだしたる時 汝等この山にて神に事えん」（出エジプト３・12）**

「私がお前と一緒にいることが証拠だ」

と。旧約は「共に」という角度がつよい、新約は「中に」が強いと、私は言いましたね。

●人格と霊格

この「共に」の世界は人格的なんです。「中に」は霊的なんです。さっきから言っているとおり、

「人格的・霊的」

というこの二面は離してはいかん。でないと、力がなくなる。人格的だけだったら力がない。霊的だけだったら、それはへたすると危ない。心と魂、心魂というね。具体的には友だちでも一緒にいれば楽しいでしょう。

キリストも、復活のキリストがエマオ途上で三人目の旅人となって一緒に歩いたでしょ。あれは「共に」の世界です。そうすると、宿屋に入って御飯を食べだしたら、今度は中に入ってしまった。即ち、本当の「共に」は必ず「中に」をともなう「共に」です。本当の「中に」はまた「共に」という面も持っている。

「一緒にひとつ行きましょう」

と、そうするとこの「一緒」が今度は「一つ」になって「中に」入ってしまう。だから、友人関係でもそうでしょ。本当に信頼している友人関係は、一緒にいるがその友達の心の中に入ってしまったようになる。

「お前と俺とは一つだ」

なんて。そんな歌があったね。まぁ恋人同志もそうでしょう。……

「共に」と「中に」

ということ、これは非常に離すことができない。人間は人格的であり霊的である。だから、

「霊的人格が今大事だ。霊的人格者が足りない」

と私が言っているのはそのことです。無教会では、「人格、人格」ということはもう私はさんざん聞かされた。けれども、この

「霊格」

の方は聞かないんだ、無教会では。この霊格的な角度が大事です――まぁ「霊格」なんていう言葉があるかないか知らんよ――霊格、「神格」と言ったっていい。漢字は便利だから、どしどし作ればいいんだ。ドイツ語だって、字引にない言葉がたくさんあるよ、哲学者や宗教家が言っている言葉には。

「字引にありません」

なんていったってダメだよ。勝手につくるんだから。私もそれ式なんだ。誰かそう言っていたよ、

「小池先生は話すごとに新しい言葉をつくる」

と。神格、霊格ということ。手島さんというのはこの角度をつよく出したから、歴史的に意味があるわけです。

エレミヤはどちらかというと、心の預言者、一番深い意味において心の預言者です。

「心腸を見たもう万軍のエホバよ」

という。腸（はらわた）を見たもう。これはハートの預言者です。イザヤはガイスト、霊の方です。イザヤとエレミヤを混ぜてしまって、両方共もたなくてはいかん。けれども、イザヤも勿論、人格の面もあるし、エレミヤも勿論、霊格の面がある。でなければ、こんなエホバの言葉なんか聞けやしませんよ、人格だけだったら。霊的な面がもちろんあるわけです。しかしまぁ、人の出来というか質というか、それからいうとエレミヤという人は心のひと、心の預言者です。心の預言者、涙の預言者といわれる。……

●平伏しぶっつぶれ

私はもう少し霊格でありたいんです、霊的な事態にはくるんですけれども。キリストの聖名を本当に呼んでいれば、そうなって護られているから有り難いです。しかし、霊的という方面では、申し上げているとおり、いつもぶっつぶれていなければダメです。

「ぶっつぶれ」

とはいい言葉だな。平伏しとかぶっつぶれ。平伏しぶっつぶれのないところには、本当の御霊の世界は開示してこない。即ち、

「平伏し・ぶっつぶれ」

ということは、「私がない」ということ、「私心のない」ことです。

私はこの頃、いろんな人にいろんなことででっくわして話しているうちに、宗教のことに自然にきてしまうんだね。そうすると、来た人たちが――来た人とか、あるいは道で会った人とか、学校にやって来る人とか、いろんな人が――

「非常に今日は思いもよらないお話を承りました」

といって喜んで帰っていく。それが不自然でないんだよ、本当にね。それは溢れてくるから仕方がない。そうなったら、本当に恐いものはないですよ。そして、

「あの人にはこう言わなくてはならないだろうか。この人にはまぁこの辺で遠慮しておこうか」

なんて、そんなことはありゃしない。人間の魂というものは、本ものにぶつかると何か感ずるんです。だから僕は、

「万人は宗教人だ」

と言うんです。感じないなら宗教人ではないわけです。ところが、魂というのは、本質は本当の宗教的なものには感ずるようになっているんだから。御霊の世界のこの力というか、権威というか、これは本当に有り難いです。それを

「私の信仰は」

なんて、信仰をサムシングにしているうちはまだまだです。しかし、手島君はよく「信仰」ということを言うものだから、あのお弟子さんたちは皆そういうことを聞いているから、

「信仰もへったくれもない」

なんていうことを私が言うものだから、みんなおったまげてしまう。それが本当の信仰なんだから、逆説的に。

●中共人

そういうのがこの「共に」の世界です。「ミット」（共に）と「イン」（中に）は――ヘブライ語でいうと「共に」は「エッツ」という字です――「共に」が、しかしここには「中に」はないけれども、神さまに従って行きまた語るというためには、神の霊が本当に彼の魂を捕まえていなければ、中に入っていなければ、それは動けない。だから、「共に」の奥には「中に」があるということを、もうひとつ読まなくてはいかん。そこが読めなかったら、本当に読んでいることにならない。これは「中共」みたいだな（笑）。「共」と「中」と。「中共」というのは素晴らしい。……

「我々は中共人である」

なんて、ちょっと普通のクリスチャンにはわからない。……私はキリストの中共人であります。あなた方もキリストの中共人です。困るね、こういうことになるから私の話は。何

にも私は考えてないです、今日何を話そうかと。そうなってくるから。これはやはり、

「エホバの言我に臨めり」

というようなわけだ。……

私たちは、集会は一回ごとに前進しているんだ。

「今日はどうしても〔集会に〕来れない」

という事情の人はあるさ。それは仕方がない。けれども、

「〔集会に〕出ようと思ったら、お客さんが来まして、行けません」

なんて、そんな電話を昔かけてくる人があった。「何ぬかすか！」と言いたかったが、そうまで言わなかったけれども。

「お客さんなんか〔一緒に集会に〕引っ張って来い」

と言いたい。

「私はお客さんよりか大事なことが今日はあるんだから、あなたは帰りなさい」

なんて、お客に言うくらいの気魄でなければダメですよ、信仰の世界は。私はおざなりの集会をしているのならともかく、真剣勝負でしているんだから。いい加減な気持でくる人はやめてもらいたいというのは、そういうわけです。

「〔集会に行くと、他の何々するのに〕時間的に足りない」

なんて思っても、来ればその足りない時間を質的に完全にオーバーしてしまう。それだけの弾力のある魂にならなければダメですよ、しょっちゅう計算ばっかりしているようなことでは。信仰の世界は超計算の世界だからね。

「何時間眠らなければどうだ、どれだけカロリーをとらなければどうだ」

とかね。タクワンと握り飯でいいよ。日曜は、あなた方、断食して来た方がいいかも知れないよ。朝、御馳走なんか食べてきたらもう全然ダメです（笑）。

ミカ書の６章８節、

「8 **人よ彼さきに善事（よきこと）の何なるを汝に告げたり　エホバの汝に要（もと）めたもう事は唯正義（ただしき）を行い　憐憫（あわれみ）を愛し　謙遜（へりくだ）りて汝の神とともに歩む事ならずや**」（ミカ６・８）

この「謙遜（へりくだ）りて汝の神とともに歩む」ということは、

「ぶっつぶれていなければ歩けない。ぶっつぶれていなければ、神さまと一緒に歩けませんよ」

という意味です。

「俺は神さまと一緒に歩いて、だいぶ偉くなったな」

なんて、冗談じゃないよ。ぶっつぶれている人と神さまは一緒に歩いてくださる。だから、

「謙遜（へりくだ）りて汝の神とともに歩む事ならずや」

という。これは非常に大事な句です。これが本当の実存であり、本当の礼拝であるわけです。

それから、マタイ伝のおしまいに、

「18**イエス進みきたり、彼らに語りて言いたもう『我は天にても地にても一切の権を与えられたり。19されば汝ら往きて、もろもろの国人を弟子となし、父と子と聖霊との名によりてバプテスマを施し、20わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教えよ。視よ、我は世の終まで常に汝らと偕(とも)に在るなり』**」（マタイ28・18～20）

と。イエスの言葉です。キリストは我らと共にいます。

「インマヌエール」「我らと共に」

という。イエス・キリストが「我らと共に」「インマヌエール」という名前なんだから。しかも、御霊は「我らの中に」という。御霊のキリストですよ勿論、「共に」も「中に」も。マルコ伝の終わり、これもそうだ。

「20**弟子たち出でて、あまねく福音を宣伝(のべつた)え、主も亦ともに働き、伴うところの徴をもて、御言を確(かた)うし給えり**」（マルコ16・20）

「主も亦ともに働き、伴うところの徴」、これは御霊の徴です。徴が顕れるわけです。パウロもしょっちゅう手紙の中で、

「汝らと共にいまさんことを」

と祈っているだろ。あれです、みんな。

「**言は神と共にあり**」

というヨハネ伝の１章１節。共在・内在・中在。真理というものはそういう有機体的構造になっていますから。

●霊と言

9 **エホバ遂にその手をのべて我(わが)口につけ**

「手をのべて口につけ」というのは勿論、霊的な幻だよ。エホバの神さまは何か形を持っていて、「どんな形だろうか?」なんて、そういうような思い方をしたらいかん。それは霊的な事態の具体的表現になるわけです。

我(わが)口につけ エホバ我にいいたまいけるは 視よわれ我言を汝の口にいれたり

「言が汝の口に入る」ときには、これは「霊言」ですから、霊も一緒に入ってくる。いいですか。霊と言をまたこれも分けてはダメですよ。霊と言を、「ガイスト」と「ヴォルト」を分けてはダメです。イザヤ書59章21節、

「21**エホバいい給わく なんじの上にあるわが霊(みたま) なんじの口におきたるわがことばは 今よりのち永遠(とこしえ)になんじの口より なんじの裔(すえ)の口より 汝のすえの裔の口よりはなれざるべし わがかれらにたつる契約はこれなりと 此(これ)はエホバのみことばなり**」（イザヤ59・21）

ここにイザヤは「わが霊」ということと「わが言」ということを対句にして使っている。でありますので、エレミヤのこの言がきたときにも、口に言が入れられても、これはもちろん霊言であるわけです。御霊と一緒です。新約でいうと、エペソ書６章の17節、

「17**また救の冑（かぶと）および御霊の剣、すなわち神の言を執（と）れ。**」（**エペソ６・17**）

「御霊の剣、すなわち神の言」。神の言は御霊の剣である。神言は同時に霊言である。

「わが言は霊なり生命なり」

でしょうが、キリストは。神の言が口につけられたということは同時に、霊なり生命なるところのもの、即ち聖霊が来てなければ、その言が言でないわけです。そういうようにして、しっかりと預言者エレミヤははっきりとエホバの霊によってつかまれ、それによって、そのまた御言によって動き出す。これが即ち彼の召命であるわけです。そして、

「自分は何も出来なくていい、何も言えなくていい。私がさせる、私が言わせる」

と。こういうわけです。

10**みよ我今日汝を万民のうえと万国のうえにたて 汝をして或（あるい）は抜き 或は毀（こぼ）ち 或は滅ぼし 或は覆（たお）し 或は建て 或は植えしめん**

と。抜いたり、毀ったり、滅したり、覆したりと、やっつける方が多いね。そして、建て植えしめる。悪いのがたくさんいるから、やっつける方が多いらしい（笑）。

エレミヤという人は、これを読んでいくとわかるように、非常に心の預言者です。どちらかというと、弱い方の人なんです。気が弱いのかもしれない。けれども、これにひとたび神さまの霊がきて、言葉がはっきりしたら、もうこれは俄然変わってしまう。

もともと、パウロさんは強い方だった、イザヤなんてのも。けれども、エレミヤだとかホゼアなんていうのはどちらかというと弱い方。ホゼアはエレミヤの先駆者だよね、預言の系列からいうと。ホゼア、エレミヤ、ヨハネとこうくる。

強い方はアモス、イザヤ、パウロなんてなわけだ。ルッター、内村鑑三、こちらでいうと日蓮みたいな。手島さんもそっちの方だ。彼も非常にまた一面涙の人ですけれども。藤井先生というのは非常に義に強くてこわい。内村先生もこわがっていたけれども（笑）。

「藤井はこわいよ」

と言ったそうだ。けれども、先生は芯には非常にまた女性的なところがあるんだよな、私は知っているから。だから、エレミヤだのダンテが好きなんだ。

とにかく、これがエレミヤの召命であって、もう年齢によらず、自分の強さによらず、むしろ、

「われ弱きときに強し」

という。一番弱いひとは誰かというと、キリストですよ。一番強いひとは誰かというと、これもキリストです。イエスというひとはもう本当に、

「幸いなるかな、悲しむ者」

なんです。「慰められる」なんて言うものだから、ニーチェのやつが「あんな女々しいのはダメだ」なんていう。ニーチェは、キリストが何か弱々しく感じたらしいね。それはニーチェの誤解ですよ。彼は強がったから、自分がダメになった。

本当に全託して女性道です。女性道が実は本当に今度は男性道を含んでいる。全託していくと、相手は最強のもので絶対者だから、それでキリストはいかなる英雄よりも英雄であった。女性と男性を本当に自分のうちに持てるんです、この福音の世界に入ると。女の人の気持も男の気持もよく分かる。私なんかＡＢ型だからなおさらよく分かる（笑）。これは冗談ですよ。冗談ですけれども、福音というのは、それが本当の人間です。ゲーテなんていう人はだいぶそういう角度の人です。

「永遠に女性的なるもの」
「永遠に男性的なるもの」
の両面を本当に持っていると、
「永遠に人間的なるもの」
ということになる。それは「永遠に神的なるもの」が来ると、そうなる。みんなこれは一つになってしまう。パウロが、

「奴隷も自主もなし、男も女もなし」

というのはそういう境地です。そういう自在な境地をつかめるから。普通、相対的にいうと、男は強そうで弱かったり、女は弱そうで強かったり、まぁいろいろですけれども。

そういうようにして、このエレミヤは忽然と、しかし神さまの側からは本当にはっきりとその生まれぬ前から存在を見ぬいて、あるいは本当に存在そのものを与えて、そして、選んでおられた。それは何のためかというと、こっち側の何もののためでもなかった。それは本当に神の御意が行われるため、伝えられるためです。

そして、ギリギリのユダの滅びのときに預言したエレミヤの預言は、歴史の終わりに至るまで滅びない預言として残る。本ものはその時の特殊性をもって永遠に伝わるところの何ものかをみんな持っている。これはエレミヤ書を読んでいけばわかる。

これが選びの人、選ばれたるひと。だから、自分が生涯を通してどういうことにおいて神の栄光を表すか、福音を表すかと、そのことだけを念として進んで行けばいいわけです、神本位、キリスト本位に。神本位、キリスト中心で動かなかったら、もう無限の展開はないし、本当の力はこない。これはもうはっきりしている。自分の方に切り替わったらダメです。だから、私が「無者」というのはそういうことです。

では、終わります。賛美歌448番「みめぐみを身にうくれば」を歌いましょう。